

FIND SELECT この一冊

プレゼント：
ご希望の書名を書いてメール
ぽっくすへお便りください。
抽選で今月掲載の4冊の中か
らお好きな本を1冊プレゼン
トします。メールにてのご応
募もOKです。

「治らない」時代の医療者心得帳

春日武彦著
吉野朔実画
医学書院
定価1,400円+税

著者は精神科医で多くの本を書いています。常に病者に寄りそいながらも、異形な現実を冷静に分析する手腕はなかなかのものです。著者のちょっと斜に構えていながら生真面目な姿勢も共感もてます。本書の副題は「カスガ先生の答えのない悩み相談室」とあるように、経験年数の浅い医療者の悩みに回答する形式をとっています。医療者の日常にいかにもありそうな仕事や困った患者や同僚についての悩みに、自分の経験や人生観を踏まえ回答しています。その回答欄には同僚の困った質問や患者さんの心無い言葉に対する「切り返し」ものについて、これがなかなか鋭く面白くて必見です。また最終章では共著もあるフランス文学者の内田樹との対談で「中腰力」というキーワードで矛盾に耐える力を養うことを勧めています。吉野朔実の挿画も楽しくて、肩の凝らない、しかし中身は濃い内容です。治療家にも参考になるお勧めの一冊。

リハビリテーションという幻想

三好春樹・
高口光子共著
雲母書房
定価1,700円+税

介護保険でも介護予防という名の機能訓練が入り、高齢者の自立支援が奨励されています。リハビリも当然のことと高齢者を駆り立てます。著者らによれば「リハビリ」はある種のイデオロギーになっていて、その幻想にみんながまどわされているというのです。高齢者に、ひたすら回復、自立をもとめることの理不尽さと罪深さ。必要なのはリハビリよりも生活の活性化です。著者たちは理学療法士から介護の世界へ入っています。三好は現場を離れて介護アドバイザーとして活躍。高口は7月号でも「介護びっくり日記」を紹介した現役介護のプロ。どうやら両者とも介護の世界ではカリスマ的存在のようで、その共著ですから当然刺激的です。介護が世間に認知されていない時代から、きつく厳しい介護の現場で蓄積されてきている経験。その経験の蓄積は、介護をというより、生きること、老いることを考えさせてくれます。お薦めの一冊。

ヒトはなぜ病気になるのか

長谷川眞理子著
ウェッジ
定価1,470円

生物は環境に適応したりできなかったり、自然淘汰を受けて進化していきます。「病気」や「異常」は“悪いコト”ですが、進化や適応という切り口から病気をながめれば違って見えてきます。腰痛や肩こりは二足歩行が原因だとよく言われますが、ヒトの進化は、二足歩行に適応してきたはずなのです。“異常”は想定外のからだの使い方が生じたせいに違いありません。また感染症との絶えざる戦いを“進化的軍拡競争”としてながめるとき、感染症をなだめずかす戦略の方向性も見えてきます。この本の中でも、妊娠から老化までをながめた最終章は、新鮮な発見が盛りだくさん。十月十日後の分娩は、何がきっかけか？ 生物学からとらえたヒトの命の不思議さに何度も膝を打ちました。おばあちゃん子は三文安いといわれたりしますが、いやいやどうして、ヒトはおばあちゃんに育てられるのが自然だと思えたりします。楽しめる一冊です。

第三の脳

皮膚から考える命、こころ、世界

傳田光洋著
朝日出版社
定価1,500円+税

「皮膚は身体を包んで護るためにある」と信じられてきた常識。それを覆すような能力が皮膚にあることが分かってきたのは今世紀になってからです。20世紀末まで、皮膚感覚を担っているのは神経だと考えられていました。しかし皮膚にある各受容小体は数ミリ単位の間隔で分布していますが、優れた職人は、もっと小さなミクロン単位の中がみや傷も手で認識できます。研究の結果、すべての皮膚表皮のケラチノサイト細胞に温度と圧力に関する受容体がいくつも発見されました。しかも皮膚は温度や圧力だけでなく色を感じ、皮膚バリアを一定に保つ機構は神経系を介さずに皮膚からの水分蒸散量を検知して働くこと、皮膚独特の免疫システムの機構があること等も分かかってきたといえます。著者は資生堂の主任研究員を務める皮膚生物学者で、東洋医学の経穴の概念に深い関心を寄せています。皮膚の持つ特異な能力に驚かされるお薦めの一冊。